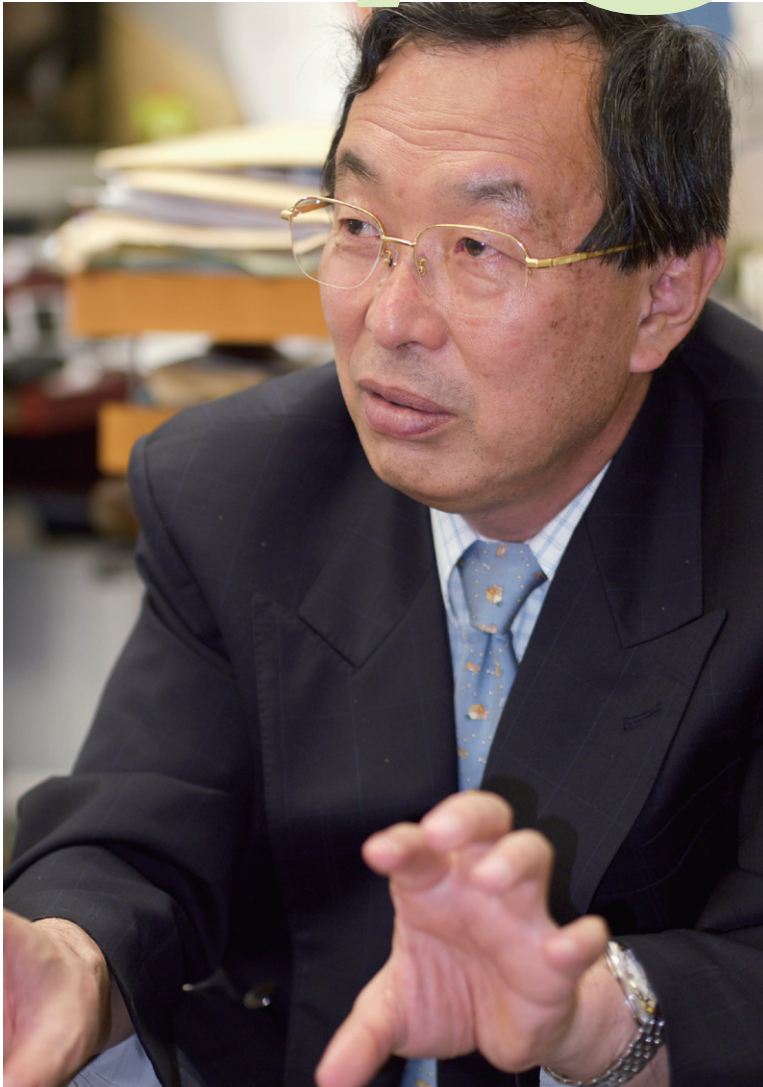


# VOICE

編集部が聞く

第31回



## 吉田宗人

特定非営利活動法人和歌山国際脊椎先端技術開発研究会理事長  
和歌山県立医科大学整形外科学教室主任教授

腰痛は、日本人にとって最も身近な愁訴のひとつ。加齢による変性で起きるケースが多く、高齢化が進む現在、腰痛に悩む人はさらに増えると見込まれている。

2012年2月、和歌山県立医科大学整形外科学教室主任教授の吉田宗人氏が、腰痛治療の先進的な技術である脊椎内視鏡下手術の向上と拡大を目的にNPO法人を立ち上げた。吉田氏の教室はすでに多くの実績を上げており、NPO法人設立によって、活動を加速度的に展開していきそうだ。

聞き手：『DOCTOR'S MAGAZINE』編集部  
文：横山 奈緒

## 内視鏡だからこそできる 低侵襲かつ的確な処置

ラーメンの「秘伝のタレ」のように、私たちの持つ脊椎内視鏡下手術の技を門外不出にしてしまえば、ここ和歌山の地に患者さんが続々と集まるかもしれません。しかし、この技術を持った医師が日本各地に増えれば、治療できる患者さんの数も格段に増えていくはず。全国各地の病院で、安全にこの手術が広く行われるようになること——それが私たちの願いです。

そんな思いから、和歌山県立医科大学整形外科学教室主任教授の吉田氏が立ち上げた「和歌山国際脊椎先端技術開発研究会」のNPO（特定非営利活動法人）認可が、2012年2月14日に下りた。

日本人の愁訴の中で圧倒的に多いのが腰痛。その原因のひとつである脊柱管狭窄症に限れば、約580万人の方が罹患しているというデータがあります。腰痛は加齢による変性によって発症しがちですから、高齢化が進む今、患者数の増加は明らかです。

しかし、それにもかかわらず、脊椎脊髄病の専門医は全国で1000名程度、その中で脊椎内視鏡下手術・技術認定医の資格を持ち、椎間板ヘルニアの手術ができる医師は100名程度。さらに特殊な手術までできる医師となれば、ほんのひと握りです。

吉田氏が得意とする脊椎内視鏡下手術の最大の特徴は、低侵襲であることだ。

これまで一般的に行われてきた椎間板切除術では、大きく切開し、骨から筋肉をはがし、さらに骨を大きく切り取らなければなりません。そのため、身体に大きな負担がかかっていました。

しかし、内視鏡下手術であれば、たった1・6cmほど切開するだけなので、病変部以外はほとんど傷つけずに済みます。しかも出血量は5〜10cc程度と椎間板切除術の1/10以下に抑えられます。麻酔から覚めればすぐに歩け、術後の痛みもほとんど残りません。

つまり、従来は1〜2週間程度入院が必要だったのが、脊椎内視鏡下手術であれば麻酔から覚めたら歩行が可能であり、5日程度で退院することができるようになります。

実際、何名かのアスリートにもこの手術を施したところ、皆、短期間で復帰できたのです。十分に回復させるためには、これまでの手術であれば復帰までに半年近くが必要でしたが、今では1ヶ月程度で済みますよ。

きわめて低侵襲な脊椎内視鏡下手術。この手術を支えるひとつには、内視鏡そのものの進化があると、吉田氏は語る。

近年、カメラ、モニターの性能が劇的に向上し、顕微鏡と遜色がないほど、細かく鮮明に見えるようになりました。見えていければ正確に手を動かせますので、はるかに手術しやすくなりました。

かつて脊椎手術は、血管が密集しているのだから「出血との戦い」といわれていた。しかも、万が一、神経が傷ついてしまった場合、修復が非常に困難。脊椎内視鏡下手術は、ほとんどタプー視されていた。そのため、内視鏡そのものの進化と手術法の確立によって脊椎内視鏡下手術が実用化された時には、大きな驚きを呼んだほど。現在ではさらに、脊椎内視鏡下手術が腰痛治療の未来を担うといわれるほどに期待される手術となっている。

## 基礎から最先端まで 数多くの疾患を診られる環境

同研究会では、脊椎内視鏡下手術・技術認定医の育成にも努めている。同研究会の関連病院のいずれかにクリニカルフローとして就職し、就職先の病院や、大学病院それ以外の関連病院で行われる脊椎内視鏡下手術に携わりながら経験を積んでいく。

和歌山県立医科大学の当教室では、1998年から、全国で先駆けて椎間板ヘルニアに脊椎内視鏡下手術を適用し始めました。そして脊柱管狭窄症、頸椎症性神経根症、頸髄症等にも広げ、約4000件の手術を行ってきた実績があります。また、当研究会の関連病院でも、年間延べ2000件以上の手術を実施しています。

脊椎内視鏡下手術・技術認定医の資格を得るためには、まずは脊椎脊髄外科指導医の資格が必要であり、そのためには、3000例の脊椎手術に、執刀医もしくは助手として携わった経験が求められますが、当研究会であれば症例数には、まず不自由しません。それに、基礎的な手術から難易度の高い先端的

な手術まで日々実施していますので、短期間で技術認定医を取得できるはずですが、術式を確立している施設で、きっちりトレーニングすれば、誰でもできるもので、資格取得を希望される方は、ぜひ当研究会に来てほしいと思います。この手術は天才的な技術の上に成り立っているものではないのです。

## 医師を育てることは より多くの患者を救うこと

技術認定医の育成に注力する吉田氏。NPO法人を立ち上げるほど、積極的に活動する理由は何だろうか。

ひとりの医師を育てれば、手術を受けられる患者さんが100人増える——という考えがはじまりですね。私個人が執刀の回数を増やすには限界がありますが、同様の技術を持った医師を1人、2人と増やしていけば、格段に手術を受けられる患者さんの数も増えていきます。自分達だけが突出した技術を持つていても、仕方がありませんから。

それに、大学の私にとって、教育自体は責務であり、これまでも数多くの学生や医局員を育ててきました。ただ、当研究会の設立により、大学以外の多くの医師を受け入れ、育成できるようになったまでのことです。

技術認定医になりたいという希望を持ちながらも、学ぶ場がないという方は、日本中にたくさんいらっしゃるでしょう。特に医局に属さない医師は専門を勉強する機会が非常に少なく、なかなか「一流」にまではなれません。しかし、当研究会では、医師のモチベーショ

ンを高める成長の糧——第一線で臨床をやっているのだというプライドや、国際学会への参加、発表の機会等を得るには最適な場を提供しています。向上心を持ち技術認定医の資格取得を希望するすべての医師に向けて門戸を広く開け、最良の支援をしていきます。

吉田氏の言葉の端々から、教育に対する熱意と、多くの患者を救いたいという思いが感じられる。

勉強に求められる方々には、確かな技術を身につけて帰ってほしいと思います。

万が一、合併症が起きた場合、医師にとつては、それは数ある症例のひとつでしかないでしょう。しかし、合併症が起きた患者さんは辛い思いをし、ひどい場合にはその人の人生まで変わってしまうかもしれないのです。

私が十分な技術を持った医師を育てたいと思う理由は、ひとえに多くの患者さんが、健康やかに過ごせるようになってほしいと願うからなのです。

## 最先端を走る「和歌山」 脊椎内視鏡下手術のメッカに

同研究会の名称には「国際」という言葉が入っている。そこに込められた思いは何だろうか。

脊椎内視鏡下手術において、間違いなく日本が最先端技術を持っており、その日本の中でも当研究会がトップを走っていると自負しています。ですから、日本のみならず、世界

中に、私たちの技術を発信するのが使命です。ちょうど今、インドネシアからの留学生が2週間ほど、来日してトレーニングしています。さらに、7月には香港から2週間、9月からは、インドネシアの医師が1年間勉強に来ることになっています。また、当研究会を立ち上げる前ですが、整形外科教室で中国、香港、台湾、エジプト等からの留学生を受け入れた経験もあります。

それに加えて、私自身が海外に行って手術することもあります。最近では中国、インドネシアでライブサージェリーもしましたね。

現在、世界中で腰痛に苦しんでいる方が大勢いらっしやいます。脊椎内視鏡下手術の潜在的ニーズは計り知れません。

そのなかでも、比較的生活が豊かな地域の人々から腰痛の治療を求められます。生活が豊かになると、生活に支障がある「かどうか」というところに目を向ける余裕が生まれるからだと考えます。

現在、中国のように経済状況が一挙に好転する地域がほかにも増えていくことが十分に考えられます。アジアの医師たちはしっかりと手術を施行できるよう、社会的に成熟する前から備えておくべきでしょう。

同研究会は、医療が世界的に向上するための一翼を担っているともいえる。いや、すでに脊椎内視鏡下手術の世界的なメッカであるといえるかもしれない。LCCC (Low-Cost Carica) 格安航空会社) の関西国際空港への国際線参入が相次ぎ、海外からの移動が容易になることも、同研究会の取り組みの広がりプラスの影響がありそう

## PROFILE

よしだ・むねひと



- 1978年 和歌山県立医科大学卒業  
和歌山県立医科大学診療医 臨床研修
- 1980年 和歌山県立医科大学病院 臨床研修医
- 1981年 和歌山県立医科大学附属病院 整形外科助手
- 1982年 堺市立堺病院 整形外科勤務医
- 1984年 国立村山病院(国立病院機構村山医療センター)  
整形外科 国内留学
- 1987年 和歌山県立医科大学附属病院整形外科 助手
- 1989年 社会保険紀南総合病院整形外科 医長
- 1990年 社会保険紀南総合病院整形外科 部長
- 1991年 和歌山県立医科大学附属病院整形外科 助手
- 1995年 和歌山県立医科大学附属病院整形外科 講師
- 1997年 アメリカ ペイラー医科大学 脊椎外科 招聘教授
- 2000年 和歌山県立医科大学附属病院  
リハビリテーション科助教授
- 2003年 和歌山県立医科大学附属病院整形外科 教授
- 2005年 公立大学法人和歌山県立医科大学医学部運営  
協議会 委員 地域・国際貢献推進本部長

- 日本整形外科学会 代議員  
脊椎脊髄病委員会 委員長  
専門医試験口頭試験委員
- 日本脊椎脊髄病学会  
技術認定委員会 委員
- 日本脊椎インストゥルメンテーション学会 幹事
- 日本内視鏡低侵襲脊椎外科学会 世話人
- 日本最小侵襲整形外科学会 世話人
- 日本整形外科最小侵襲手術手技学会 評議員
- 中部日本整形外科災害外科学会 評議員
- 関西スポーツ医科学研究会 評議員
- 日本整形外科スポーツ医学会 評議員
- 日本脊椎内視鏡手術手技研究会 評議員
- 日本臨床スポーツ医学会 評議員
- 日本脊髄障害医学会 評議員

だ。吉田氏は、医療とともに経済にまで目を向けている。

かつて日本は、車や家電、精密機械の製造・販売等をお家芸としてきましたが、今はどれも他国に取って代わられてしまいました。しかし、医療分野においては、私の携わる脊椎内視鏡下手術のみならず、多くの分野でトップクラスを走っているはず。アメリカのように、医療を産業とし、医療技術、機器等を国外に輸出すれば、おそらく日本の経済にも大きなプラスとなるでしょう。

### 患者と心を通わせる 温かみのある診療

患者を助けたい、人々や社会を支えたいという気持ち、吉田氏のこれまでの活動を通して強く感じられる。吉田氏は、患者の一言一言に喜びを感じ、支えられ、それを糧に走り続けてきたと語る。

脊椎内視鏡下手術の最先端の現場と言えは聞こえは良いのですが、実際には、壁にぶち当たったり、辛い思いをしたり、と厳しい毎日です。

しかし、「先生のお陰で第二の人生を歩めます」「こんなに元気になりました」という感謝の言葉を聞くと、不思議と苦労が吹き飛んでしまうのですよ。

腰痛で悩んでいる患者さんは、たいてい暗い顔をしていらっしやいます。長期に続く痛みに加え、思うように動けないストレス、治るのだろうかといった不安のために、苛々し

たりふさぎ込んだりしてしまうのは当然のことでしょう。関西7大学における調査の結果、腰痛患者の7割程度が気分がうつ状態になるとの報告があります。

ところが、そんな患者さんでも、症状がとれると、見違えるほど明るくなり声を掛けてくださるのです。ばあっと晴れやかな表情になるので、「こんなに素敵な笑顔の人だったんだ！」と驚かされたことが何度もありました(笑)。

心から嬉しそうに語る吉田氏。患者からの評判が高いのは、技術の高さだけではなく、患者と心を通わせながら診療する姿勢にあるのではないだろうか。

腰痛の患者さんの治療は、しっかりと話を聞くとところから始まります。

まず、大切なのが十分な説明でしょう。原因や治療の展望等が分かれば、患者さん自身が気持ちを整理し、少なからず前向きな気持ちを取り戻せますからね。意外に思われるかもしれませんが、多くの場合は、きちんと説明し、今後の方針がわかるだけで、痛みが消えてしまうのですよ。

インタビューの中には、終始、「患者さん」という言葉が登場した。患者さんのために——それが同研究会の活動すべての出発点なのだ。吉田氏の率いる当研究会は脊椎内視鏡下手術の分野を力強く牽引し、日本のみならず、世界の「和歌山」として今後も躍進を続けるだろう。